

「県内入学者」確保に注力

6月上旬に開かれた香川大の学長選考会議で、長尾省吾学長(73)の再選が決まった。地方創生の柱となる人口減少の克服に向け、県内唯一の国立大の役割に注目が集まる中、どのような「魅力づくり」に取り組むのか。集大成の2年間を迎える長尾学長が意欲を語った。

―進学時に多くの若者が県外に流出している。

香川大は県内からの受験生が少なく、県出身の入学者は過去20年間で、25〜29%の割合で推移している。県内の若者が多く入学してくれば、地元若い人材を多く残すことができる。そのためには香川大が変わることが重要であり、若者を引きつける魅力づくりに取り組まなくてはいけない。地域に根ざし、教育や研究、人材育成などの分野で特色を持たなければ生き残ることはできない。

―具体策は。

地域社会や受験生の二



「若者を引きつける魅力づくりに取り組む」と話す長尾学長

ズにアンテナを張り、具体的な人材育成や就職先を示すことができる新たな学部・学科を作りたい。県感を持って多種多様な提案系に秀でたクリエイティブな人材や地域文化や観光振興に寄与する人材が育成

―学内の危機感とは。

危機感を持った一番のきっかけは香川大・愛媛大連

合法務研究科(四国ロースクール)の廃止を決めたこと。新学部・学科では同じ轍を踏まないよう慎重に検討している。また、文部科学省からは新しい社会に適応する教育、人材育成を進めてほしいとも言われており、法学部や経済学部は今のままではいけないと感じている。なぜなら両学部を卒業した学生の就職先はほとんど同じで、学部のメリットを生かし切れていない。従来の文系の在り方ではなく、地域のニーズにマッチした学部をしたい。

―県内の受験生を増やす他の方策は。

高校生に香川大に進学してもらえよう取り組むタスクフォース(組織)を立ち上げ、各部署の教員が県内の高校に出向くことを決めた。講義などを通じて高校生と触れ合うことで、香川大の魅力を理解してもらうことが目的だ。先生方に

新学部・学科、ニーズに合わせ

はほとんど高校に足を運んでもらう。
―「地方創生」にどう携わるのか。

研究面では県の産業成長戦略の目玉とされる項目に希少糖や遠隔医療ネットワーク「K-MIX」、防災関係などの香川大のシーズがほとんど入っている。現在、研究戦略室を作って、いろいろな産業で活用できる研究について議論し、選ばれたプロジェクトに研究費を配分している。地域社会に貢献できる新しい芽は着実に出てきている。

―抱負を。

学長就任後の4年間は無我夢中で取り組んできた。残された時間はあと2年しかない。これまで着手してきたことをブラッシュアップし、各部署の教員らの意見を反映しながら改革を進めたい。在任中に何らかの形を世間にアナウンスしたい。